



映画雑感

柴生田 晴四

(経済倶楽部理事長)

です。まさにこの二人が不倫関係になり、その秘密を抱えることになった女中さんを演じた黒木華が銀熊賞に輝いたのです。この映画で興味深いのは、満州事変から日中戦争へと進んでいく日本の世相がていねいに描かれていることです。

▼新年明けから、邦画をいくつか続けざまに鑑賞しました。若いころはもっぱら洋画を見て過ごしましたが、最近は目が弱くなって字幕を見るのが難儀になったので、邦画中心になりました。で、休日にはせつせと映画館通いをしています。

先ごろベルリン映画祭で主演女優賞を獲得した「小さいうち」も封切りの日に行きました。実は松たか子と吉岡秀隆のファンなの

▼予想外(?)の大ヒットとなった「永遠の0」では、海軍航空隊の凄腕飛行士が最後は特攻に志願して戦死します。その主人公の生き様を、その妻だった祖母の死によって実の祖父の存在を知ることになった孫たちが調べっていくという形で映画は展開していきます。「小さいうち」でも独身のまま死んだ女中

さんの親類の若者が残された謎を解き明かしていきます。どちらも、戦時下の時代を知ら

ない若い世代が、謎を追うことで少しずつ競争に翻弄された時代日本人の姿を理解していきます。

▼昨年公開された「少年H」や「風立ちぬ」でも戦時下の日本が描かれました。しかし、本当にその時代を肌で知っていた世代は次第に少なくなりつつあります。「永遠の0」でも描かれていたように、語りたがらない人たちに重い口を開いてもらうことは簡単ではありません。また、体験談がどこまで真実を伝えているのかも慎重に見極めなければならぬでしょう。しかし、研究書や歴史書をひもとく人は限られています。その意味では、若い人気俳優が父祖の時代を探っていくという設定はとても有効だと思われれます。若い世代

の目で、かつての時代の真実を少しずつ解き明かし、理解していく作業が、まさに必要な時代になっていくのです。

▼その一方で、私自身は、芸術性や名画という枠にとらわれず、現代の若い人たちが好むような映画を楽しんでいます。最近の作品では、「陽だまりの彼女」、「カノジョは嘘を愛しすぎてる」、「潔く柔く」、「四十九日のレシビ」、「抱きしめたい」といったところです。若い人の気持ちが変わるといった御託ではなく、こうした映画は、とても私自身の心を若くしてくれるような気がします。慣れ親しんだことに取り囲まれていると精神は老いていくと言います。楽しみながら若返れるならこんないいことはありません。